

める者と謂ひつべく、公明正大なる鏡に對して  
 恥づることなきを得ざらむ、夫れ容姿の美醜は  
 天性なり。しかし美なりとて必ずしも健全な  
 りと言ふべからず、醜なりとて必ずしも不健  
 全なりと言ふべからず、且その美醜は妙齡の間  
 のみにして、年老いては更に變りなかるべし。  
 これに反して、心の美醜は生涯の歴史なり、品  
 性なり。更に子孫孫末代までも影響するも  
 のなり。されば婦人は面を照らす鏡をとる毎に、  
 心を照らす鏡あることを忘るべからず。漢の蔡  
 邕が女誡にも女子の化粧に思ひつけて、心の  
 訓誡を述べたり。又古人も「心さへうつろふもの  
 をます鏡すがたのみとも思ひけるかな」とま  
 わたり。蓋し心の鏡とは何ぞや、他なし聖賢の  
 教訓なり。更に刮目せば全社会のあらゆる活動  
 は大なるレンズとして參考すべきこと多から  
 む。噫我等女子は朝に夕に物につき事にふれて  
 鏡を有することを忘れず、時々折々照らし見て  
 おのが心の塵をはらひ、鏡の如き美しき徳、鏡  
 の如き明けき智を得、その名を萬世にのこし、

千載の下人の摸範たらむことを期すべきなり。  
 さはいへかゝるおほけなき希望いつの世に果し  
 得べきかと思へば、折しも傍にありつる鏡の面  
 のみ見守られていと美しくもはた恥かしさにた  
 えず。



短歌

歌

先帝陛下を悼み奉りて

河崎なつ

萬代も千代もまします我が君と國民こそ仰ぎてありしを  
 青山のみはふりの殿美はしくなれりときくもかなしかりけり  
 道ゆくもふと忍ばるゝはるかなる都の方の今日のみはふり  
 みはふりの日ともなりけり國津御民ひびきしづめて夕暮に入る  
 白き幕打ちめぐらして造りぬるみはふりの殿さびしかりけり  
 二千里の北南あれ國民は都の方を今ぞをろがむ  
 天地のみかみ守りませ大君の大御車のいでましの道  
 かしこくもいまや御輦車いでまさむ千代田の城のかの御橋上  
 日の御旗月のみはたの揺られつゝゆくさま見ゆれ秋風の中  
 三百里北の國なる草山の原にぬかたれみたまをろがむ  
 さやさやと沈黙の街の夜を吹く初秋の風つめたしかなし  
 めとづれば赤阪あたりかしこくも大みひつぎのゆきますが見ゆ  
 こしへに都さかりて御輦車はかへり來まさすかなしからずや  
 御靈柩は鴉の湖紫にひらけしほごりみゆきますすらむ  
 草山の草ふく風もほろほるとなく虫の音も悲しこの秋